
我々共が夢の跡

ハチエット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我々共が夢の跡

【NZコード】

N3879Z

【作者名】

ハチエット

【あらすじ】

辺境の貧しき国、ヘイムズを踏みつけ空を貫く巨大な影。

誰とはなしに人々はその影を魔王と呼んだ。

魔王来訪から三年後、ある者はいざこかへ消えたヘイムズの民の残した財宝を狙い、ある者は栄光を求め、ある者は失った者を再び手に入れるため、ある者は力を求め、ある者は正義のため、ある者は何者かに導かれ、再びその地に人が集う。

しかしその地は既に人類のモノではなかった。

泥の雨に打たれ、吹き荒ぶ風に吹かれ、険しい山々を超えて、魔に

飲み込まれ、一つまた一つと命の代償は払われる。
それでも人々の歩みは止まらない。

魔王来訪の地、魔都ヘイムズを巡るダークファンタジー。

人の子よ何故。

「おい、なにか言ったか?」

至近距離にも関わらず、耳を劈くよつた雨音に負けじと大声でガラクシーが叫んだ。

「僕はなにも。だけど学者先生、じじじや誰も何も言つていなくて人の声が聞こえるなんてしそつちゅうだ。で、そういう時は隠れてやり過ごすのが一番なんだ」

「休憩はさつきしたばかりだろつ!」

「僕の指示に従え先生。少し戻れば教会があつたな、そこまで戻ろう」

「五歩進むたびに四歩戻らなきやいかんのか? これじゃいつまで経つても目的地に付かんぞ」

「今日は特別だ。さつきから何かが妙に、畜生め、騒がしい。まるで蜂の巣を突いたみたいだ」

言葉で説明出来ない、暗澹たる不安がブツチャ一の胸中に去来る。具体的に、どう危険なのか、なにがおかしいのか、口に出せないのがもどかしい。

それはたとえば、数メートル先の景色の色が、わずかに赤みがかつてているように見えるとか、雨音が僅かに耳に重く残るとか、足元を跳ねる泥がいつもよりも高く飛んでいる気がするだとか、そういう了些細な他愛のない違和感の集合体だった。一つなら良いが、それがいくつもあると、予想もつかない良くないことが起こる気がする。

笑つてしまつほど漠然とした不安感だが、それを無視するわけにはいかなかつた。

「先生、今日はダメだ」

「ダメ？ くそ！ 私は君に、確かに報酬を払ったよな？ きつかり、銀貨三枚！」

「僕があなたに頼まれたのは、貴方を安全に『裏ドアの皆』に案内することだ。そして今強行すると、永遠に辿り着かない可能性がある」

ガラクシーは不満げに唸り、やがて渋々と言つた調子で言つ。

「倍の報酬を払つてもいいぞ」

「ダメなものはダメだ。僕を信用してほしい。報酬は最初に交わした契約のもので十分だ」

一度頑なに口に出してみると、不安感はますます確信めいてきた。逃げなければならぬ、それも、可能な限り早く。

「急げ先生。引き返すぞ」

「まったく、ままならんな」

ガラクシーは不満を口にしながらも、結局はブッチャードに従つた。

来た道を引き返し、僅か五分の出来事だった。一寸先の視界を覆わんばかりの雨に紛れ、それはやつてきた。

「止まれ、誰だ」

前方に人影。ブッチャードは即座に手斧を抜き、後に続くガラクシードを手で制した。

輪郭以上のが見えないのは雨の所為かと思ったが、そうではなかつた。それは確かに人影だった。
人影以上のものではなかつた。
人影。
縁だ。

雨の中に入間の形をした輪郭を認識出来る。それは決して、現実の眼で見えているものではなかつた。縁なのだ。そこに人間の形をしたものがある、ということだけはハッキリと判るのだが、音もなければ、匂いもない。形すら、実際には見えない。

「畜生め。そんな馬鹿な」

ふと意識を向ければ、その影は既に無数にあつた。囲まれている

……というわけではない。影たちは各自の進むべき方向へと歩んでいて、こちらのことは全く意に介していない。

「ブッチャー？」これは？

ガラクシーが不安そうな声を上げる。

「人影が見える……存在が希薄だ……早々に私もいかれたか」

「フランクシユバックだ！ 先生走るぞ！」

「ああ？」

「僕の背中だけを見て走れ！ 来い！」

言うや否やブッチャーは手斧を投げ捨て、雨に濡れた外套も脱ぎ捨て、泥を蹴つて走りだした。

「ブッチャー！ どういうことだ！ これはなんだ！」

「説明してる暇はない！ 走らなきゃお陀仏つてことだ！ 外套は捨てろ！」

「どこまで！？」

「建物……教会まで！ もう黙るぞ走れええええええええええええええ！」

影はますます増えていった。大きさはバラバラで、大人のような人影も、子供のような人影もある。並び立つように歩くもの、手を繋いでいるように見えるもの……いや、実際に、ような、ではなく、大人の影と子供の影なのだろう、とブッチャーは思った。

（ヘイムズの記憶）

ヘイムズが死んだ後……ヘイムズが魔都と呼ばれるようになつた後に頻発する現象だ。

一か月に一度、ヘイムズはまさに思い出したかのように過去の幻影を呼び覚ます。（一か月といつても、大体一ヶ月程度に、という意味でだが）誰も直接は口にしないが、あの影は明らかに消えた筈のヘイムズの民の幻影だった。

（だがなぜそう思うのだろう）

もちろん、明確に、あの影が消えたヘイムズの民の幻影だと誰かに教わったわけではない。だが、直接あの幻影を目にしたもの多く

くは、不思議とそれを悟った。

それどころか、幻影の中にいると、もっと多くのものが見えるような気さえする。そしてそれを不幸にも実行に移した人間は、例外なく狂い軋み倒れていった。

雨が途端に重くなり、足が空回り始めた。全速力で走っているにも関わらず、汚泥に腰まで浸っているかのような感覚だ。悪夢に追われているかのようだ。実際、このもどかしさも、現実味のなさもそれに近い。

まっすぐに走っているのか、それすらも疑わしい。

（畜生め。なぜ今起こる？ 以前はつい一週間前だぞ？ 教会はどこだ？ 建物に入らなければ、間に合つのか？ 先生！ 先生さんは付いてきてるのか？）

「ブッチャヤー……待て、待つてくれ……足が

と、後方から細い声。

「おかしいんだ……足がなくなっている気がする……」

ガラクシーが走るのを止め、座り込んだ。

「人が沢山いる。祭りだとみんな言つている……音楽が聴こえる……聞いたことがあるな……ああ、そうだ、実は私は、以前……若いころだが、ここに来たことがあるんだ。祭りに参加したんだ。この曲は、ヘイムズの民が好んで、伝統的にだが……弾いたり聴いたりする曲だ。祭事の時はよく流れてる……」

ガラクシーの声は、ほとんどうわごとだった。眼は中空を漂つていて、走ることをすっかり忘れている。

「立て先生！ 置いていくぞ！」

「そうだ、思えば妻と会つたのは、その祭りだつた。馴れ初めなんてスッカリ忘れていた……十年に一度の大きなお祭りだつたらしい、結局、なにを祝つてているのか、誰も知らなかつたが、街中に酒が入つていて……子供もな、その日だけは、飲んでいいらしい」

ブッチャヤーはそれ以上耳を貸さなかつた。先生すまない、とだけ小さく呟き、正面に向き直る。出会つた三日程度の間柄だつたが、

それでも彼のことは気に入っていた。好んで見捨てたいといつわけではないし、もっと致命的な場面じゃなければ、多少なら命の危険だつておかしてもよかつた。

だからと言つて、無駄死には「めんだつた。

（貴方は助からないだろう。あとほんの少し状況がマシだつたら……きつとあなたをひきずつて歩いていた）

今はもう先に進むしかなかつた。既に、ブッチャーの耳にも喧騒が僅かに聞こえ始めている。

（あとほんの少しマシな状況？ なにを言い訳しているんだ、僕は。誰も聞いちゃいないつてのに！）

高慢なプライドがチクチクと痛む。それでもきつと助けていた、きつと助けていた、と心の中で何度も呟くが、その内は自分自身では覗き込めなかつた。

（行かないと、誰にもどうにも出来なかつた。誰にも……）

その時、雨間にそれは見えた。十字架だ。こちらを見張るかのような様子で、高々と、堂々たる姿で。

（教会……こんなに近づいてたのか……）

距離にして、五十メートルはないだろう。が、今や身体に圧し掛かるものは重い雨だけではなかつた。後方ではガラクシーが突つ伏している。

（出来るだらうか。彼を拾つて、教会まで……歩むことが、僕に）

無理だ。と残酷な声がする。

実際に、ブッチャーの身体と精神は限界だつた。喧騒と、ついには音楽までもがその耳に聞こえてきた。もう戻れない。いや、あと五十メートル歩くのがえ怪しいんだ。と、ブッチャーは声に出したかった。

（いつたいそれを誰に聞かせたいんだ、僕は）

済んでで、口に出すのだけは堪えた。が、それは身体の中で暴発した。もう戻れない。五十メートルをたつた一人で歩くのだつて難しい。助けることなど出来はしない。

膝を付き、喘ぐ。息が苦しい。喉を裂けばきつと呼吸が楽になる。と忠告にも似た声が聞こえた気がして、実際に喉に手を掛けるが、ぎりぎりで抗つた。

誰も助けることなど出来はしない。誰も、誰かを、助けることなど。

人には限界がある。肉体の限界もそつだが、きっと良心の限界だろつ。

（見てきたはずだ。ブツチャー。お前が、それを必要とした時に、誰もそれを与えなかつたよう（元））

その、自分自身の説得にも似た考えが頭を過つた時、ようやくブツチャーの頭の霧が晴れた。歯を食いしばり、再び立ち上がる。

「僕はブツチャーじやないぞ馬鹿めが！」

そう、心の内に語りかけてくる魔王に向かつて叫び、ガラクシーの元へと走つた。

魔都ヘイムズ（後書き）

始めまして。ファンタジー初挑戦になります。
どしどし意見、質問、改善点等、なんでもお待ちしております。

ブッチャヤーはガラクシーを抱えたまま、教会を蹴飛ばした。恐れていたよりもあっさりと扉は開き、二人はその場に倒れこんだ。外の喧騒が嘘のように、教会内部は静かだった。

（教会か……）

ブッチャヤーは信仰とは縁のない人間だった。いや、むしろ、貧しい少年時代を過ごしてきた者にはありがちなことではあるが……ある種の敵意を持っていた。

神や伝承が憎いわけではない。信者や、司祭が憎いわけではない。それが生む衝突が憎いのだ。

啓示をお題目に武力を振るう宗教家も憎いし、その事に過剰に反応し、暴力を返す無神論もまた憎い。

（憎しみあわなければいいんだ、憎しみあわなければ……）この地を見ろ、外の人たち……僕たちは欲望のまま傷つけあつてているが、まだ健全だ……）

疲労の所為か、思考がまとまらない。雨に打たれ過ぎた所為で寒気もある。打ち捨てられた教会だが、暖炉くらいはあるだろう、とガラクシーを引きずつたまま奥へと進む。

「ブッチャヤー……？」ああ……助かったのか……ありがとう、戻つてきてくれて」

と、驚くほど明朗な声。ガラクシーが目を覚ましていた。

「先生、大丈夫なのか？」

「君のお蔭でね。助かったよ、いい腕だ。君を雇ったのは正解だつた。座り込んでいる時は頭の中に霧が掛かっていたが、終わつてみればハツキリと思い出せる。酷い体験だつた、と、君が戻つてこなければ、そう感じることさえなかつたのだろうな」

「僕自身は……向いてない」とはするもんじゃないなと思つていた

所だよ

実際、小遣い稼ぎのつもりで雇われたものの、誰かを守りながらこの地を歩むことが、ここまで辛いとは思わなかつた。

「ここは安全なのか？ 教会？」

「別に教会だからってわけじゃない。理由は知らないが、あれは野内では起こらないんだ。ここにいる限りは、あれからは身を守れる。あれからはな」

「他になにがあるのか？」

「なんでもだ。とにかく、今田のこととで懲りたなら、以後は……少なくとも、契約通り、皆に着くまでは僕の指示は絶対だ。僕が走れと言つたら走つて、しゃがめと言つたらしゃがむんだ。場合によつちや、歌えと言つて歌えかもしれんが、その時は疑問を口に出す前に歌つてもらう」

「私は音痴だぞ」

ガラクシーはやや的違いな返事をしたが、それでも首肯した。

「君の指示には従う。だが、質問をするくらいはいいだろ？ あれは一体なんなんだ？ 人の姿が……おそれくはヘイムズの民が見えたが……」

「僕らはあれをフラッシュバックと呼んでいる。あれは……そうだな、貴方の言うとおり、ヘイムズの民なんだろうな。なぜ起こるのか、実際の正体はなんなのか、誰だつて知りはしないが、僕らの認識では、あれが起きるのは一か月に一度の筈だつた」

「だつた？」

「前回は一週間前だ。今回のフラッシュバックは、全く突発だ。予想すらしていなかつた。畜生め。今回のこと我が例外中の例外ならいいんだが」

ブッチャヤーを含め、この地に訪れている再開拓者はフラッシュバックの発生時期は野外の探索を避けることにしている。発生時期が安定していた分には、ヘイムズの災厄の中では回避しやすい部類ですらあつたが、それを裏切られた。

これまでますます外を歩きづらくなる。

「……明日には収まる。首尾よく行けば、雨も上がるだろうな。出发はその後だ。火を焚いて寝てしまおう。砦にも明日中に着く」
「外ではまだあれが起こっているのか？」

「ああ、そうだ」

「なあブツチャヤー、あれの中に居た時に……何かが見えた気がするんだ。凄く大切な何かが……」

「そう言つて誰も戻つてこなかつたぜ。僕は貴方がここに何を探しに来たのかは知らないが、貴方の探し物のことを、この地は知つてゐる。それは忘れるなよ」

幸い、教会内部は燃料には事欠かなかつた。古びた本もあれば、ほとんどの椅子や机が木製のもので、火をつけるのも、それを保つのも容易い。

「そういえば、ここで本名を名乗つてはいけないという理由が判つたような気がしたよ」

炎に影を揺らしながらガラクシーが言つ。早めに眠つたほうがいい、と忠告はしたが、寝付けないらしく、とつとつと語り始める。「ずっと私をガラクシーと呼ぶ声が聞こえていた。ああ、懐かしい声だつた。たぶん、母だ。ガラクシーこっちへおいで、と。誘惑に耐えかねてふらふらと歩きかけたが、思えば母が私をガラクシーなんて呼ぶわけがないんだよなあ。ここに着てから、適当に名乗つているだけの名前なのに」

ガラクシーの言つとおり、再開拓者は決してヘイムズの地では本名を名乗らないようにしている。この地の支配者が……魔王と呼ばれている得体のしれない何者かが、その本名を利用するからだ。

「僕もあの中にいたとき、君を見捨てるように言い聞かせていた自分が、僕をブツチャヤーと呼んでいた。名前を知られていれば、僕も貴方も廃人になつていたな」
(見てきたはずだ。ブツチャヤー。お前が、それを必要とした時に、誰もそれを与えなかつたように)

その、自問の声がありありと蘇る。今更ながら、何者かに心中に進入されていた、という事実を思つとゾッとした。

「この地、ヘイムズの今の支配者の影響力は、文字通りヘイムズまで、外の世界にまでは手が伸びないと云ふとか。つまり、万能ではない」

（今までな）

ブッチャヤーはこゝそりとそつ思つ。一つの国を一夜にして消滅させるほどの力の持ち主が、明田にも沈黙を守る保障はない。

「明日には晴れるかな？　こゝに着てからずつと雨だつたり曇りだつたり霧だつたり、まだ私は、この地の支配者を見ていらないんだ」

「焦らなくても、晴れれば嫌といつほど見れる。なにしろあれと来たら、冗談抜きで山よりも大きい。で、また一つ忠告だが、あまり魔王を見すぎるなよ」

天気さえよければ、ヘイムズの王城に屹立する、天を貫かんばかりの巨大な魔王の影がこゝではいつでも見ることが出来る。ブッチャヤー自身、初めて目にした時にはその姿に膝を折り、柄にも無く神の存在について考える羽目になつたが、それも一ヶ月もすれば見慣れた風景となつた。

魔王は、来訪後三年、寝返りの一つすらせずに沈黙を保つてゐる。その姿は影が見えるばかりで、質感すら定かではない。そもそも生き物なのか、それとも別の何かなのか、それすら知るものはいない。

そして、魔王の膝元に辿り着いたものも、またいない。

「魔王は、私達の存在に気がついているのだろうか」

「さあ。気づいていないか、気にしないでいてくれることを祈るのみだ」

「ブッチャヤー、私は……」

ガラクシーが僅かに息を呑み、それから言ひづらそうにだが声を絞り出した。

「あそこに行きたいんだ。ヘイムズが王城、魔王の足元に」「辿り着いたものなどいない」

ガラクシーの言葉はブッチャーにとつて意外なものではなかつた。誰も彼もが、そうだ。栄光も金も、奇跡も、全てはあの場所に集結している。

「いないのか？ 本当に？ 誰一人？」

「王城は城壁に囲まれていて、その外は山だ。山間にはフラッシュバックから身を守る為の建物なんてないし、城壁の門は閉ざされている。門に辿り着くための唯一のルートには……橋が……」

「橋？」

「橋だ。やたらでかい、石造りの立派な。あの場所はずつと深い霧に覆われていて、一寸先も見えないような有様でな。以前、熟練の再開拓者が十人がかりで橋を渡ると鎧を出て行つた」

その中には見知った顔もいくつかあつた。ヘイムズに着き、右も左も判らぬブッチャーに生きる為の術を教えてくれた、恩師とも呼べる者もいた。

「帰つてきたのは三人。一人は誓で目を覚まし、すぐさま呪詛を吐きながら近くにいた人間に切りかかつた。一人はなにも言わずに首を吊つた。最後の一人は……」

「どうなつた？」

「いない。どこかへ消えた。僕はそいつを探しているのさ」

魔都ヘイムズ2（後書き）

一週間に一度か、二度程度の更新頻度になりそうです。
長いお話になりそうですが、気の向いた方はお付き合いを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3879z/>

我々共が夢の跡

2011年12月16日20時53分発行